



(おおはし・たけひこ)

1955年東京都生まれ。

早稲田大学第一文学部卒業。同大学院文学研究科博士後期課程単位取得満期退学。

共立女子第二中学高等学校教諭、甲南女子大学専任講師、助教授、教授を経て2004年より現職。

専攻は日本近代文学。著書『室生犀星への/からの地平』（若草書房、2000年）、共著『言語都市・上海 1840-1945』（藤原書店、1999年）。現在は、戦時上海における日本文学者の動向や日本の文化統治の実態解明に研究の力点を置いている。

上海から 平和を考える

大橋 毅彦 氏

(本学文学部教授)

●日時:2007年10月31日(水)
第3時限(13:30~15:00)

●会場:関西学院大学

西宮上ヶ原キャンパス 文学部チャペル

—どなたでも聴講できます—

講演内容

アジア太平洋戦争期の上海は、近代日本が中国に対して積み重ねてきた正負の遺産を集中的に体現するとともに、ナチの魔手から亡命してきたユダヤ人にとっての一時的な避難所ともなった場所だった。そんな都市で少女時代を過ごした小説家の林京子と、ドイツ出身のユダヤ人版画家D. L. ブロッホが残した作品及びそれが辿った運命を紹介しながら、芸術を通して見えてくる戦争と平和はどのようなものか考えたい。上海を起点とするが、もし可能なら、そこでの体験と同じくらいの比重をもって彼らを創作活動に駆っていった、長崎での被爆体験やダッハウ収容所での体験についても触れてみたい。